



対話を目指した学習



ほしな

第5号

村上市立保内小学校
強い心 豊かな心

〒959-3107

村上市下鍛冶屋264-2

TEL0254-62-2302

FAX0254-62-5553

日本人は「対話」に不慣れた国民
「今求められている「対話的な学び」」

校長 須貝 学

私たちは、日々の生活の中で、多く人と会話をしています。しかし、対話をしているとは、あまり言いません。

先日、韓国訪問中のアメリカ合衆国、トランプ大統領と北朝鮮の金委員長との「対話」が、軍事境界線の板門店で実現した、というニュースがテレビや新聞で大きく報道されました。世界の外交場面でも度々取り上げられる「対話」は、学校教育でも今、旬なキーワードになっています。

新たな学びのスタイルとして「主体的・対話的で深い学び」が求められています。学校でも、対話的な学習を目指し、多くの授業で、「話し合い」や「グループ活動」を取り入れていきます。しかし、「ただのおしゃべりではないか」「必要な話し合いなのか」など批判的な意見も耳にします。

著書『対話のことば』を刊行した、慶應義塾大学の井庭 崇教授によると、「対話」には、「会話」とは少し違う意味合いが含まれているのだそうです。一見、「会話」と「対話」は同じように見えます

が、「対話」には、相手がどのように物事を見て、何を感じているかを理解するということが含まれているそうです。つまり「対話」では、自分の考えを述べることも、相手の見ている世界や感じていることを感じ取り、理解することがより大切になるのです。

ところで、礼節を重んじ道徳性が高いと評される私たち日本人は、この「対話」が苦手なようです。歴史的に私たちは、同質性が高いムラ社会で生きてきました。そのため、似たような感覚を持つ者同士であり、「相手を理解する」ことを特に意識する必要がなく、不慣れになったと言われています。

令和という新しい時代は、益々グローバル化し、多様性が共存する社会となります。異文化を理解し、様々な立場の人との共生が求められます。未来を担う子どもたちには、「対話力」が必要不可欠です。学校でも家庭でも、範を示しながら、「相手を理解する」という「対話」の本質に子どもを導いていかなければなりません。